

## 学区別評価

## (1) すばる学区評価

**令和6年度 彦根市地域包括支援センターすばる「城東学区分」地域支援計画および実施結果**  
**(区域ごとのニーズに応じて重点的に行う業務について)**

地域の目標： 地域の暮らしやつながりを再確認し、今・これからの環境に適応して暮らせる方法について考えていける。

ニーズ	目標	活動内容	担当・役割	場所	実施時期	成果	問題点・今後の方向性
店や近所の支援が得られやすい環境だが、困りごとを発信・共有する機会が減ってきていることで、問題や悩みを抱え込みがちになってしまうため、安心して相談できる体制づくりが必要である。	商店や各公共機関、医療機関などの協力を得て、困りごとの相談を早めに行えるようになる。	①大型スーパーや各個人商店、公共機関（金融機関、郵便局等）を訪問し、定期的に困りごとを情報共有できる機会や、出張相談会等の企画について打診する。また、活動している機関との連携を取れるようにする。  ②地域の各診療所や薬局等に訪問し、健康問題や病気で困っている方について相談しやすい関係づくりをする。	①学区担当者 管理者  ②地域包括支援センターすばる全職員	① ・平和堂銀座店 ・アルプラザ彦根 ・金融機関 ・郵便局 ・東地区公民館 ・商店 ・商工会 ・寺・神社 ・みんなの食堂  ②城東学区の各診療所、薬局	①通年  ②通年	①平和堂や郵便局に2回啓発ポスターの掲示依頼を通して、困りごとを聴き取るようにしており、随時相談のある関係性を維持できている。個人商店に対して、地域包括支援センターのチラシを配布して、相談先としての啓発を行った。寺・神社へのアプローチは行っていないままである。  ②今年地域包括支援センターのチラシを配布していないが、1件の薬局に対して圏域会議での参加を呼び掛けて意見を聞くことができた。	・元々関わっている店・機関との関係性は維持しているが、まだ関わる機会の少ない寺・神社等へのアプローチが行えなかった。近隣住民とつながりの可能性のある場所や団体について広く気付けるようにしたい。
地域で困りごとを解決する仕組みや話しやすい環境が整っておらず、地域での暮らしづらさや困り事が増えてきているため、地域のつながりについて改めて考える必要がある。	地域でのつながりのきっかけをつくり、お互いに協力し合えることや課題を解決していく仕組みをつくっていく。	③サロン等の住民グループ、各会合（自治会や民区会）、地域行事への参加や声掛け（手紙、電話）を通して気軽に話し合える関係づくりをする。また、健康講座の開催など活動の協力ができると伝える。  ④生活支援コーディネーター（地域支え合い推進員）と定期的に情報共有し、地域との関わり方や課題について検討する。  ⑤城東学区情報交換会や地域懇談会に参加し、地域の課題解決のために地域包括支援センターができること（連携機関との相談や圏域会議の開催など）について提案・協力する。	③学区担当者・現場担当者（住民グループ）  ④学区担当者  ⑤学区担当者 主任介護支援専門員	③城東学区の金亀体操グループ、サロン等 ・自治会会議 ・民区会（城東1・2） ・地域行事 ・東地区公民館  ④開催場所は都度調整  ⑤東地区公民館、各自治会館等（開催場所は都度調整）	③通年  ④通年  ⑤通年 （随時開催時）	③把握している体操グループ・サロンへ2回訪問して実情確認や、に「びーちく新聞」を渡して、健康・地域包括支援センターの啓発および相談のきっかけづくりを心掛けた。民区会の定期参加を通して、相談を受けることもあり、圏域会議の参加も呼びかけられた。アルプラザ彦根にて行われた、健康フェスタ、健康アップフェスタに協力し、金亀体操や地域包括支援センターの啓発の機会になった。東地区公民館文化祭で、介護保険と地域とのつながりの関係について伝える機会となった。  ④学区を担当する、生活支援コーディネーター（地域支え合い推進員）、健康推進課保健師と学区の情報共有の場を4回開催し、課題検討した。  ⑤住民福祉活動計画推進会議に毎回参加し、意見・提案等協力している。圏域会議を1回開催している。	・圏域会議を通して、民生委員の困りごとや活動する上での課題を確認・共有することで、地域のつながりの再発見や課題解決の糸口を検討できるとよい。 ・東地区公民館の文化祭には引き続き展示参加して、経年で地域共生社会の深化・推進の認識が浸透するように働きかけていく。 ・今後も住民福祉推進活動に参加・協力して、地域のつながりを関係機関および地域住民と検討していく。

## 学区別評価

## (1) すばる学区評価

**令和6年度 彦根市地域包括支援センターすばる「鳥居本学区分」地域支援計画および実施結果**  
**(区域ごとのニーズに応じて重点的に行う業務について)**

地域の目標： 利便性が高くないからこそ、学区全体に支え合いの仕組みが浸透し、鳥居本での暮らしが続けられる。

ニーズ	目標	活動内容	担当	場所	実施時期	成果	問題点・今後の方向性
<p>少子高齢化が進み、高齢者            独居世帯、要介護認定者数            が増え、地域の行事や集ま            りは減っている。コロナ禍            もあり、人と人、地域と地            域のつながりが減り、孤立            や抱え込みが増えている可            能性がある。つながりや支            え合いの活動が増えること            で、人や地域の孤立、抱え            込みを予防したい。</p>	<p>地域情報や課題            を収集、発信す            ることで、地域            が広がること            が広まること            で、地域や住民            の孤立が予防で            きる。</p>	<p>①            生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)とともに民区会へ            の参加を継続し、関係性を構築・強化し、お互いの活動に協力して            いく。            ②            学区内の医院・薬局・郵便局・J A・駐在所へ定期訪問を行い、情            報共有し関係性を継続する。地域のお寺や養護学校との関係再構築            について検討を進めていく。            ③            生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)とともに、「さん            あかAAA」会議や、たすけあい鳥居本の会合等に継続参加、定期的            な関わりを持ち、それぞれの活動の推進、活性化のため専門的立ち位            置としてアドバイス等の支援を行う。            ④            鳥居本中学校の福祉授業を担当し、高齢福祉について学び、理解を            得られる機会を継続する。小学校の福祉教育にも関わりを持ち、若い            世代との交流やつながる機会をつくる。            ⑤            地域の活動での困り事や住民からの相談内容について、生活支援            コーディネーター(地域支え合い推進員)と情報交換・共有すること            で、地域活動の方向性を統一する。</p>	<p>①            ・学区担当者            ・生活支援コーディネーター(地            域支え合い推進員)            ②            ・学区担当者            ③            ・学区担当者            ・主任介護支援専門員            ・生活支援コーディネーター(地            域支え合い推進員)            ④            ・地域包括支援センターすばる全            職員            ・生活支援コーディネーター(地            域支え合い推進員)            ・彦根市認知症HOTサポートセン            ター            ⑤            ・学区担当者            ・生活支援コーディネーター(地            域支え合い推進員)</p>	<p>①            各開催場所            ②            学区内の関係機関            ③            各開催場所            ④            鳥居本中学校            鳥居本小学校            ⑤            各開催場所</p>	<p>①            各開催時            ②            3か月に1回程度            ③            各開催時            ④            各開催時            ⑤            定期開催</p>	<p>①            定期的に参加し、必要時は連携もでき            しており、関係性は強化できている。            ②            医院や薬局等への啓発は定期的実施            できた。受け入れも良く関係性は構築            できている。お寺と養護学校への啓発            はできていない。            ③            会議への参加は定期的できており、            関係性も構築できている。            ④            中学校への福祉授業を実施した。小学            校への関わりは持てなかったが、社会            福祉協議会とも共有はできている。            ⑤            生活支援コーディネーター(地域支え            合い推進員)と定期的に情報交換、共            有、検討の会議を開催できた。健康推            進課や学区の健康推進員とも連携が            できた。</p>	<p>①            来年度には民生委員が交代とな            る。新たな関係構築が必要であ            る。            ②            寺や養護学校との関係構築をど            うしていくか。つながる目的            の明確化が必要である。            ③            今後も住民主体の活動を支えつ            つ、協働していくことが必要で            ある。            ④            小学校での福祉授業へ参加して            いく。            ⑤            学区会議の回数を減らして実施            してきたが、開催頻度について            評価、検討が必要である。</p>
<p>地域には医療機関は2院の            みで、商店はなく、移動手            段も限られている。高齢に            なっても不自由なく生活し            たい。</p>	<p>地域で活動や参            加の機会、居場            所があること            で、心身ともに            健康に過ごす。</p>	<p>①            地域の金亀体操やサロンのグループを訪問し、活動状況を把握し、            生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)とともに、住民活            動を支援する。            ②            びーちくばーちくを運営し、介護予防や互助についての発信や生活            での困り事等も確認しながら、住民交流を続ける。            ③            鳥居本学区文化祭、宿場まつり等の地域行事に参加し、住民交流と            健康や介護についての情報発信を行う。</p>	<p>①            ・学区担当者            ・生活支援コーディネーター(地            域支え合い推進員)            ②            ・地域包括支援センターすばる全            職員            ③            ・地域包括支援センターすばる全            職員            ・生活支援コーディネーター(地            域支え合い推進員)</p>	<p>①            各開催場所            ②            デイサービスセン            ター鈴の音            ③            各開催場所</p>	<p>①            訪問時            ②            毎月(冬季は休            会)            ③            各開催時</p>	<p>①            各グループへ定期訪問を実施できた。            ②            定期開催できた。短時間だが参加者が            が難しいグループがある。それ            考える話題提供もできた。            ③            宿場まつり、文化祭等にて啓発を実施            できた。宿場まつりでは詐欺予防を、            文化祭では介護保険をテーマに啓発し            た。</p>	<p>①            新しいグループの立ち上げがあ            る中、活動が終わったり、存続            が難しいグループがある。それ            ぞれにフォローは必要である。            ②            歩いて参加できない方もあり、            たすけあい鳥居本と協働してい            るため、連携をしていく。            ③            文化祭での展示ブースへの参加            が少ないため工夫が必要であ            る。</p>

## 学区別評価

## (1) すばる学区評価

**令和6年度 彦根市地域包括支援センターすばる「佐和山学区分」地域支援計画および実施結果**  
**(区域ごとのニーズに応じて重点的に行う業務について)**

地域の目標： 住民同士、住民と地域の社会資源とのつながりの持続や、新たなつながりができるよう関わっていく。

ニーズ	目標	活動内容	担当・役割	場所	実施時期	成果	問題点・今後の方向性
<p>自治会や老人会に未加入、または加入していても実態として参加していない、老人会はそもそもない、解散したなどから、つながりが薄れてきている。</p> <p>また、住民が困りごとの相談先が、民生委員の中にも住民からの相談のつなぎ先がわからない、浸透していない実態がある。</p> <p>そのため、支援の必要な人が地域にいても、その人へ支援が届きづらい。</p> <p>見守り合い活動の推進など、つながりを広げ、深めていくことと、相談先の周知について浸透する必要がある。</p>	<p>支援が必要な人に対し、速やかに支援ができるよう、見守りや相談体制についての、連携の仕組みを維持・広げることができる。</p>	①現在フォローしているサロン、金亀体操グループ、見守り合い活動への継続的なフォロー。	学区主担当・各団体担当	各開催・活動場所	通年	<p>①関係性を維持、より良いものになってきている。</p> <p>②生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)と協働し、一部ではあるがつながりの維持強化、必要に応じ連携を図ることができている。</p> <p>③高齢分野だけでなく、諸団体の人と関係を持つことができている。</p> <p>④市民交流フェスタ、湖上平地蔵の文化祭に参加できた。</p> <p>⑤啓発ポスターの掲示を定期的に依頼し、つながりを継続している。</p> <p>⑥市民交流センターにて、2回実施することができた。</p>	<p>・既存、既知の資源に対しては、継続的なアプローチが続けられ、関係性を維持することができている。</p> <p>・金亀体操グループの発足、びーちくばーちく佐和山の立ち上げなど、新たな活動、つながりもできている。</p> <p>・反面、地域包括支援センターすばるにて実施した地区診断では、計画として挙げているニーズは継続していると判断できる。</p> <p>・社会情勢としては、このニーズがより深刻化していくと考えられるため、そのニーズに対する仕組みづくりや、住民の意識の醸成を引き続き図っていく必要があるのではないかと。</p>
		②生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)と協働し、自治会、民生委員へ個別訪問し、当方の活動を広報、また見守り合い活動につなげていけるように働きかける。	学区主担当・学区担当				
		③佐和山地区の民区会、地域福祉活動計画への参加。					
		④佐和山地区の文化祭等の把握・訪問。(すばるとして、啓発での参加などにつなげられるよう、関係づくりをしていく。)	地域包括支援センターすばる全職員				
		⑤商店、金融機関、郵便局等を訪問し、総合相談の対応について広報をする。					
		⑥びーちくばーちく佐和山の開催。					
<p>自動車や自転車に乗れなくなった際の移動手段に乏しく、路線バスや愛のリタクシーの停留所まで歩けないと、生活が狭小化する恐れがある。介護予防や健康管理についての「自分ごと」の意識を広げていく必要がある。</p>	<p>介護予防や健康管理についての理解が広がる。</p>	⑦現在フォローしているサロン、金亀体操グループ、見守り合い活動への継続的なフォロー。	学区主担当・各団体担当	各開催・活動場所	通年	<p>⑦定期訪問を継続し、関係性の維持ができている。熱中症等の啓発や、体力測定も実施している。</p> <p>⑧体操グループが新たに2か所発足した。</p> <p>⑨市民交流センターにて講座を実施した。</p>	<p>・特に佐和山学区はマンション等集合住宅が多く、住人同士の関係性が希薄であったり、問題があった場合の対応にマンション管理人が負担を感じているケースもあり、集合住宅によっては自治会とは別にアプローチを検討する必要がある。</p>
		⑧生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)、健康推進課と協働し、自治会、民生委員やサロン、金亀体操グループ等へ、当方の活動を広報、講座開催の働きかけ。	学区主担当・学区担当				
		⑨佐和山地区の文化祭等の把握・訪問。(すばるとして、啓発での参加などにつなげられるよう、関係づくりをしていく。)	学区主担当・学区担当				

令和6年度 彦根市地域包括支援センターハピネス「城西学区分」地域支援計画および実施結果  
(区域ごとのニーズに応じて重点的に行う業務について)

地域の目標： 介護予防の啓発と早期に発見できる関係をつくる。

ニーズ	目標	活動内容	担当・役割	場所	実施時期	成果	問題点・今後の方向性
一般世帯や高齢者世帯からの相談が遅れるケースが多い。	支援の必要な人に早期に対応する。	①民児協定例会や見守り会議などに参加し、地域住民と連携し支援につなげていく。 ②地域包括支援センターの役割を周知する。 ③生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)と定期的に会議を持ち、見守りの場が広がるよう情報の共有と連携を図る。 ④支援につながりづらいケースなどについてハピネス訪問を実施する。	地域包括支援センターハピネス  生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)	民児協定例会  見守り会議  地域福祉活動計画推進会議  地域の集会所  北老人福祉センター・西地区公民館  医療機関・歯科医	令和6年4月1日 ～令和7年3月31日	生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)と連携し、2つの民生委員定例会や見守り会議に参加し、心配な人の情報を得たことで、個別支援につながった。  ハピネス訪問を通してSOSの発信が難しい人も支援につながることができた。	地域包括支援センターに声をかけていただく民生委員や住民に偏りがあるように感じるため、これからもより身近な相談窓口として周知と顔の見える関係づくりにも努める。関わりが難しい人へのハピネス訪問を継続する。
介護予防の意識が低い。	介護予防の必要性が理解できる。	①地域の集まりへ出向き、介護予防啓発のための講座・ほっとかない認知症出前講座・サポーター養成講座を実施する。 ②西地区公民館でフレイル・介護予防のための講座を実施する。 ③北老人福祉センターにて、年一回体力測定会を開催する。 ④北老人福祉センターにて、介護予防や認知症、特殊詐欺被害予防についての講座を実施する。	地域包括支援センターハピネス  認知症HOTサポーターセンター  北老人福祉センター  西地区公民館	薬局  学校  寺社・企業・店舗  金融機関・郵便局		地域に出向き自治会館などでフレイルや介護予防についての講座を行った。北老人福祉センターで開催する講座や活動紹介展について城北学区・城西学区の住民や金亀体操自主グループ・各種会議を通して案内することで学区を越えて参加があった。	金亀体操を継続する励みになるように、年に1回モニタリング訪問を継続する。北老人福祉センターと連携し、介護予防や認知症、特殊詐欺予防についての講座を開催する。

学区別評価

(2) ハピネス学区評価

## 令和6年度 彦根市地域包括支援センターハピネス「城北学区分」地域支援計画および実施結果

## (区域ごとのニーズに応じて重点的に行う業務について)

地域の目標： 介護予防の啓発と地域包括支援センターを周知する。

ニーズ	目標	活動内容	担当・役割	場所	実施時期	成果	問題点・今後の方向性
重度化してか らつながら るケースがあ る。	支援の必要な 方に早期に対 応する。	①民児協定例会や見守り会議などに参加し、 地域住民と連携し、支援につなげていく。  ②地域包括支援センターの役割を周知する。  ③生活支援コーディネーター(地域支え合い 推進員)と定期的に会議を持ち、見守りの場 が広がるよう情報の共有と連携を図る。  ④支援につながりづらいケースなどについて ハピネス訪問を実施する。	地域包括支援セン ターハピネス  生活支援コーディ ネーター(地域支え合 い推進員)	民児協定例会  見守り会議  地域福祉活動計 画推進会議  地域の集会所  北老人福祉センタ  医療機関・歯科 医・整骨院	令和6年4月1日 ～令和7年3月 31日	見守り会議に参加し、 心配な人の情報を得て 個別支援につながっ た。 ハピネス訪問を通して 支援につなげることが できた。	引き続き、見守り会 議など地域で行われ る会議に参加を継続 する。また、ハピネ ス訪問を継続しS O Sを発信しづらい人 も、必要な支援につ ながれるようにした い。
介護予防の意 識が低い。	介護予防の必 要性が理解で きる。	①地域の集まりへ出向き、介護予防啓発のた めの講座・ほっとかない認知症出前講座・サ ポーター養成講座を実施する。  ②千松会館と連携して、地域包括支援セン ターの周知と介護予防に関する情報を発信す る。  ③北老人福祉センターにて、年一回体力測定 会を開催する。  ④北老人福祉センターにて、介護予防や認知 症、特殊詐欺被害予防についての講座を実施 する。	地域包括支援セン ターハピネス  彦根市認知症H O T サポートセンター (連携)  北老人福祉センター	薬局  学校  寺社・企業・店 舗・コンビニ  金融機関・郵便 局		民生委員定例会に参加 することで民生委員と 顔の見える関係がで き、住民情報など声を もらうことにつながっ ている。	より身近な相談窓口 として、周知と顔の 見える関係づくりに 努める。

学区別評価

(3) ひらた学区評価

**令和6年度 彦根市地域包括支援センターひらた「金城学区分」地域支援計画および実施結果**  
**(区域ごとのニーズに応じて重点的に行う業務について)**

地域の目標： 金城学区の地域の関係機関と連携を深め、早期発見早期対応ができるよう努める。

ニーズ	目標	活動内容	担当・役割	場所	実施時期	成果	問題点・今後の方向性
・金城学区には集会所という居場所があるにもかかわらず、金亀体操を行っている地区があり、介護予防に取り組めていない住民がいる。	金亀体操を行っていない地区において、金亀体操グループが立ち上げられるようになる。	①老人会やふれあいサロン、宅老所等へ出向き出前講座をPRする。 ②現在活動中で、長年金亀体操に取り組まれている人々に対し、自主グループが無い地区の人はいないか確認し、担当地区民生委員を交え、立ち上げ相談を行う。 ③新規立ち上げの際は、代表者に運動指導員養成講座受講を促す。	地域包括支援センターひらた 民生委員・児童委員	地域の集会所等 高齢者の集まるサロンや宅老所等	令和6年4月1日～令和7年3月31日	いろいろな場面で出前講座をPRしたが、新たな金亀体操グループを立ち上げることはできなかった。 しかし、フレイル予防の出前講座を通して、運動の必要性を広めることは行えた。 金亀体操に限らず、地域住民が運動に関心を持ち、しっかりと身体を動かすことの大切さは浸透していったと感じた。	新たなグループどころか、今ある金亀体操グループも一時期に比べ、参加者減少が課題となっている。
・認知症（疑いを含む）の人は多くなっていると思われるが、介護保険サービスにつながっていない。 ・認知症への理解を促し、早期の相談ができるように今後も周知が必要である。	住民が認知症を理解し、他人事ではなく我が事として考えられるようになり、早期の段階で地域包括支援センターへ相談できる。	中地区公民館や中老人福祉センターで認知症出前講座およびサポーター養成講座を行う。	地域包括支援センターひらた 民生委員・児童委員	地域の集会所等 高齢者の集まるサロンや宅老所等  中老人福祉センター  中地区公民館	令和6年4月1日～令和7年3月31日	金城学区の集会所で、認知症サポーター養成講座や中老人福祉センターでは彦根市認知症HOTサポートセンターと協力し脳の健康チェックを実施した。 認知症の早期発見と認知症になっても安心して暮らせるよう、住民への理解を深めるよう努めた。	地域により、認知症への理解に熱心な自治会とそうでない地域との差を感じる。 住民に対し今後も認知症への理解を深める必要がある。

学区別評価

(3) ひらた学区評価

**令和6年度 彦根市地域包括支援センターひらた「平田学区分」地域支援計画および実施結果**  
(区域ごとのニーズに応じて重点的に行う業務について)

地域の目標： 平田学区の地域の関係機関と連携を深め、見守り合いの意識や認知症への理解が深められるよう努める。

ニーズ	目標	活動内容	担当・役割	場所	実施時期	成果	問題点・今後の方向性
平田学区には、見守り会議を行っている団体は、ほぼ無い。民生委員やサロンなどで見守りをされているが、どこにもつながっていない。	見守り会議が立ち上がり、地域包括支援センターとつながる。	見守り会議が立ち上がるよう支援し、心配な人への支援が早期に行える。  参加者同士の見守り合いの意識を高められるよう、支援していく。	地域包括支援センターひらた  民生委員・児童委員  生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)	地域の集会所等  高齢者の集まるサロンや宅老所等	令和6年4月1日～令和7年3月31日	「ひこね見守りネットワーク台帳」のモデル事業を通じて民生委員も見守りの必要性を痛烈に感じてもらえたが、地域での見守り会議の立ち上げまでは至らなかった。	熱心なサロンであっても、見守り会議となると会議への抵抗が感じられ、見守り合いの意識を高めることへの難しさがある。
認知症（疑いを含む）の人は多くなっていると思われるが、介護保険サービスにつながっていない認知症への理解を促し、早期の相談ができるように今後も周知が必要である。	住民が認知症を理解し、他人事ではなく我が事として考えられるようになり、早期の段階で地域包括支援センターへ相談できる。	平田公民館、各集会所にて認知症出前講座およびサポーター養成講座を行う。	地域包括支援センターひらた  民生委員・児童委員	地域の集会所等  高齢者の集まるサロンや宅老所等	令和6年4月1日～令和7年3月31日	認知症の人に対し、介護保険サービスにつながるよう支援は行っていたが、地域に対して認知症出前講座やサポーター養成講座を行うことはできなかった。 認知症の人に対し、相談場所が地域包括支援センターであるという周知はできつつある。	地域住民に対し、今後も認知症への理解を促し、早期に介入ができるよう周知する必要あり。

## 学区別評価

## (4) ゆうじん学区評価

**令和6年度 彦根市地域包括支援センターゆうじん「高宮学区分」地域支援計画および実施結果**  
**(区域ごとのニーズに応じて重点的に行う業務について)**

地域の目標： 地域の助け合い、支え合いを高齢者の暮らしの支援に生かす。

ニーズ	目標	活動内容	担当・役割	場所	実施時期	成果	問題点・今後の方向性
各関係機関や地域の支援者との顔の見える関係づくりが必要である。	地域包括支援センターの目的や機能を周知し、各関係機関とのつながりを持つ。	・出前講座など地域に向かう機会や、地域の店舗などに「地域包括支援センターゆうじんだより」を配付し、地域包括支援センターの目的や機能を知ってもらう。 ・民生委員の定例会に年1回以上、挨拶に伺い、顔の見える関係を構築する。 ・総合相談の中での地域のコミュニティの状況を知り、地域の課題を把握する。	<担当> 主担当：赤田 副担当：寺橋 <役割> 他職員も情報を共有し、主担当及び副担当を支援する。	・各会館、文化センター等 ・地域の店舗	・年間を通して随時。 ・「地域包括支援センターゆうじんだより」は年数回発行 ・5月に民生委員への挨拶を実施	・各々の関係機関、特に住民からの相談が多かった。各地区での取り組みなどは把握できず、地域全体の課題も把握できなかった。 ・「地域包括支援センターゆうじんだより」を各店舗へ配布した。 ・日の出東の見守り会議に参加した。認知症の理解を深めたいと講座の依頼があった。(令和7年度実施予定)	地区全体での相談・取組を把握し、可能な範囲で連携をとる。民生委員に1回/年は挨拶に伺う。
地域の資源を活用したり、活動に参加することで介護予防(重症化予防)できるように啓発が必要である。	地域住民に介護予防や、活用できる社会資源についての啓発を行う。	①サロン、老人会、地域の集まりに向き介護予防、権利擁護などの講座や、パンフレット、資料の配布で啓発活動を行う。 ②健康推進員、地区担当保健師と連携し地域課題を知り、講座の内容に活かす。 ③公民館で地域包括支援センターが主催の認知症予防出前講座を行う。	<担当> 主担当：寺橋 副担当：赤田 <役割> 他職員も情報を共有し、主担当及び副担当を支援する。	各老人クラブが会合・サロンなどを開催する公民館	年間を通じて随時	・金亀体操グループ訪問時や講座依頼(学区社協サロン、東出老人会)時には啓発を行った。 ・健康推進員との連携はできなかった。健康推進課の地区担当保健師とは情報交換は行ったが、協働はできていない。	健康推進員・地区担当保健師との連携を行い、協働できる活動を持つ。介護予防について啓発活動の機会を多く持つ。
市、生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)との定例会議が必要である。	市、生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)との会議を定例で開催し、情報共有等を行う。	3か月に1回、生活支援コーディネーター(地域支えあい推進員)や地域包括支援センターゆうじんと定例会議を開催する。また、地区担当保健師とも連携を持つ。	<担当> 主担当：赤田 副担当：寺橋 <役割> 他職員も情報を共有し、主担当及び副担当を支援する。	アロフエンテ彦根等	3か月に1回開催	・3か月に1回、会議を開催し、高宮地区の情報共有を実施した。	3か月に1回、会議を開催し、高宮地区の情報共有を継続する。

## 学区別評価

## (4) ゆうじん学区評価

## 令和6年度 彦根市地域包括支援センターゆうじん「旭森学区分」地域支援計画および実施結果

## (区域ごとのニーズに応じて重点的に行う業務について)

地域の目標： 人と人とのつながりのある地域づくりを支える

ニーズ	目標	活動内容	担当・役割	場所	実施時期	成果	問題点・今後の方向性
地域との関わりを持ち、地域の資源や現状の課題について把握し、住民に活かしてもらおう働きかけが必要である。	地域での活動や取組の把握を継続し、住民活動のサポートが行える。	①見守り会議や住民福祉懇談会（あさひ輝きプラン）への出席する。 ②支え合い見守り合いの仕組みづくりのための座談会に参加する。 ③住民や関係機関との関わりを持ちながら、地域や課題について把握したり、協働で活動する。 ④地域住民が利用される公共機関、医療機関、店舗、安心安全ネットワーク協力店などに出向き、センターについての周知活動を行う。	地域包括支援センターゆうじん：寺橋、木田  他の職員も情報共有し支援する。生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)とも協働する。	各自治会館や公民館	年間を通じて随時	①見守り会議、あさひ輝きプランについて、可能な範囲で出席したが、地域の課題に関して、地域包括支援センターとしての役割が果たせたか疑問が残る。 ②については座談会自体が終了した。 ③民生委員との関わりは継続できたが、その他の機関との関わりを持つことができなかった。 ④「地域包括支援センターゆうじんだより」を公民館、医療機関、薬局などに配布するために訪問し、地域包括支援センターを知ってもらうことができた。	①地域包括支援センター内で地域課題や、できることについて話し合った上で、会議に臨むようにしたい。 ③民生委員、推進会議メンバー、地域ボランティアなど地域で活動されている人との関係をより築いていけるように働きかけられる。 ④令和7年度も1回は継続する。
介護保険サービスに限らず、地域の資源を活用したり、活動に参加することで介護予防（重症化予防）ができるよう啓発が必要である。	地域住民に介護予防や、活用できる社会資源についての啓発を行う。	①サロン、老人会、地域の集まりに出向き介護予防、権利擁護などの講座や、パンフレット、資料の配布で啓発活動を行う。 ②健康推進員、地区担当保健師と連携し地域課題を知り、講座の内容に活かす。③公民館で地域包括支援センター主催の認知症予防出前講座を行う。	地域包括支援センターゆうじん：寺橋、木田  他の職員も情報共有し支援する。地区担当保健師、生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)にも協力を得る。	各自治会館や公民館	年間を通じて随時	①依頼のあったサロン（大堀、西沼波、野田山）や金亀体操グループのフォロー時に介護予防の啓発を行ったが、積極的にサロン等に出向くことはできなかった。 ②健康推進課の地区担当保健師と連携し、情報共有したが、一緒に活動するには至らなかった。 ③講座ではないが、旭森地区公民館文化祭で、脳の健康チェックを実施。比較的若い世代の人の参加があり、認知症予防啓発ができたと考えられる。	①各サロンに1回/年は出向き、地域包括支援センターや介護予防の啓発を行うとともに、関係性をつくる。 ②健康推進員との交流の機会を持つ。 ③内容は未定であるが、令和7年度も文化祭でブースを設け、介護予防の啓発を行う。
地域を支援している機関との連携が必要である。	生活支援コーディネーター（地域支え合い推進員）や彦根市、地域包括支援センターゆうじんでの定例会を開催し、情報共有を行う。	彦根市、生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)、地域包括支援センターゆうじんで3か月1回定例会を開催する。地区担当保健師とも連携をする。	彦根市 生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員) 地域包括支援センターゆうじん	アロフェンテ彦根他	3か月に1回開催	3か月に1回程度の定例会議を実施した。情報交換や、生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)と協働できることはないか話し合った。	令和7年度も引き続き実施し、協働して実施できる行事を多く持つ。

## 学区別評価

## (4) ゆうじん学区評価

**令和6年度 彦根市地域包括支援センターゆうじん「城南学区分」地域支援計画および実施結果**  
**(区域ごとのニーズに応じて重点的に行う業務について)**

地域の目標： 住民さん同士での介護予防の取組や、居場所づくりの支援など見守りのある地域を支える。

ニーズ	目標	活動内容	担当・役割	場所	実施時期	成果	問題点・今後の方向性
介護保険サービスに頼らず、地域で介護予防の活動が必要である。	継続した介護予防の取組を行い、新たな人的資源や、新しい活動場所を発見していく。	<ul style="list-style-type: none"> <li>各サロンや民区会へ訪問し介護予防の講座や話題を提供する。</li> <li>金亀体操グループのフォローアップ講座を開催する。</li> <li>金亀体操グループの新規立ち上げをサポートする。</li> <li>健康推進員、地区担当保健師と連携し地域課題を知り、講座の内容に活かす。</li> <li>健康推進員が開催するのイベントに参加する。</li> <li>スポーツフェスティバルへアプローチする。</li> <li>老人会からの依頼による講座を開催する。</li> <li>地域の行事に出向いての啓発活動を行う。</li> <li>介護施設と協働し、地域住民の居場所づくりや、介護予防についてのイベントを行う。</li> </ul>	<p>地域包括支援センターゆうじん：安原、寺橋、堤</p> <p>生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)</p>	各自治会館や公民館など	年間を通して随時	<ul style="list-style-type: none"> <li>小泉町あったかサロン、アロフエンテいきいきサロン、竹鼻、西今なごやかサロンなどを訪問し、講座や体力測定会、介護予防や消費者被害についての啓発を行った。</li> <li>新規での金亀体操新規グループの立ち上げはなかったが、伊庭団地以外(令和7年4月予定)のグループのフォローアップを行い、体操や続けていくための助言を行っている。</li> <li>スポーツフェスティバルで企業等の協力を得て、体力測定イベントを行った。子どもから高齢者まで164名の人が測定をされ、幅広い年代に地域包括支援センターや介護予防について知ってもらうことができた。</li> <li>ビバシティ彦根で開催されているぼばいきいき広場で介護相談会を6月9月11月3月の計4回実施した。介護予防ミニ講座を開催し、地域包括支援センターの啓発と介護相談を行っている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>宇尾町の金亀体操グループとサロンが役員の高齢化により終了した。サロンや体操グループを継続するための支援について課題がある。</li> <li>健康推進員 地区担当保健師と連携し、令和7年度にスポーツフェスティバルで一緒にイベントの開催を予定する。</li> <li>老人会からの講座依頼はなかった。</li> <li>介護施設との協働イベントについては、アネシス南彦根とトガノツバメで協議を継続する。</li> </ul>
新興住宅地が増え、地域との関りが薄い人が増えている。	課題が深刻化する前に相談や対応につながる環境づくりができる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>3か月に1回、市社会福祉協議会の生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)との定例会議で情報共有を行う。</li> <li>地域包括支援センターとして、高齢福祉介護に関連した様々な啓発を資料を使って行っていく。</li> <li>住民福祉活動計画推進会議のメンバーとして会議への参加する。</li> <li>民区会に出向き、地域包括支援センター業務の啓発や依頼に応じた講座を開催する。</li> <li>社会福祉協議会での福祉教育の協力(小学校への出前講座)</li> <li>「地域包括支援センターゆうじんだより」を配布し、商店や公共機関、警察、安心・安全ネットワーク協力店へ訪問し、地域包括支援センターについての周知活動を行う。</li> </ul>	<p>地域包括支援センターゆうじん：安原、堤</p> <p>生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>アロフエンテ彦根</li> <li>各自治会館や福祉センター</li> </ul>	年間を通して随時	<ul style="list-style-type: none"> <li>社会福祉協議会との定例会議で地域課題や新たな資源について情報共有を行っている。また、住民福祉活動計画推進会議に毎回参加し、地域包括支援センターの活動報告を実施し、地域課題について共有を行った。今年度は西今町と戸賀町で単位地域ケア会議を行った。</li> <li>民生委員、児童委員の定例会で「地域包括支援センターに寄せられる相談について」をテーマに、地域高齢者を支える課題について講座を行い、民生委員へ公的サービスのみでの支援の限界を伝え、地域での支援協力を依頼できた。</li> <li>「地域包括支援センターゆうじんだより」を2回発行し、公共施設や、医療機関、スーパー、警察署に配布した。サービスカウンターに張り出してもらうなどで、地域包括支援センターの存在を住民に啓発できた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域ケア会議で課題にあがった内容について取り組み、住民福祉活動計画推進会議で報告する予定である。</li> <li>地域の店舗や安心・安全ネットワークからの相談は例年どおり、相談対応を行った。令和7年度も継続してお便りの発行を行い、公共施設や店舗、安心・安全ネットワーク構築に向け訪問を行う。</li> </ul>

## 学区別評価

## (5) きらら学区評価

**令和6年度 彦根市地域包括支援センターきらら「城陽学区分」地域支援計画および実施結果**  
**(区域ごとのニーズに応じて重点的に行う業務について)**

地域の目標： 地区単位を越えて、地域での助け合い・支え合いの輪が少しずつ広がる。

ニーズ	目標	活動内容	担当・役割	場所	実施時期	成果	問題点・今後の方向性
各地区の住民が自主的に助け合い・支え合いをしようと考えているが、学区全体で知られていない。	<ul style="list-style-type: none"> <li>各地区の取組や住民自身の考えなどが学区全体に知れ渡る。</li> <li>「はなふくお助け隊」の地域での定着を目指す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>①地域住民主体となるサポート団体の組織化へ向け、住民有志や社会福祉協議会と連携を図り、地域の現状を整理する。</li> <li>②有志やキーパーソン、社会福祉協議会と協働し、組織化へ向けての具体策を挙げ、学区内支え合い・助け合いフォーラムを機に取り組める内容から施行を試みる。</li> <li>③サロンや老人会、自治会活動や見守り会議などへの介入時、各地区で活動している支え合い・助け合い活動の周知・啓発をする。</li> <li>④各地区住民福祉活動計画推進に伴い、役員や学区全体での福祉懇談会などを基に周知や支援方法などを社会福祉協議会と協働する。</li> <li>⑤サポート団体が組織化できることで、若い世代も交え、地域全体での取組へとつなげる。(県立大学学生が起業した自費支援サービスをきっかけに交流など)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域包括支援センターきらら</li> <li>・生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)担当者</li> <li>・はなふくお助け隊</li> <li>・県立大学関係者</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各地区自治会館や公民館</li> <li>・南地区公民館</li> <li>・県立大学</li> </ul>	令和6年4月1日～令和7年3月31日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・たすかるの会のサポート立ち上げを後方支援し、住民の生活サポートの手段が増えた。助かるの会の活動が花田学区全体に広がりつつある。</li> <li>・甘呂町の見守り会議の立ち上げに対する後方支援を行い、2か月に1回の開催が行えた。</li> <li>・日夏の陽だまり会の見守り会議については、見守りとしての機能が定着した。</li> <li>・民児協での講座を開催した。</li> <li>・これまで一度も実施できていなかった三津屋町で出前講座を初めて実施した。</li> <li>・日夏(日夏里館)で地域で認知症を見守る人権研修を実施した。</li> <li>・11月にケアマネジャーと民生委員を対象に勉強会を開催し、ケアマネジャーと民生委員の連携を図れる土台を作ることができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・たすかるの会のケアマネジャーに対して周知する必要がある。また、たすかるの会の定着化を図る必要がある。</li> <li>・介入できている地域に差がある。</li> <li>・日夏地区へのアプローチは地域を一つとして捉えることは難しい。</li> </ul>
高齢化の影響で活動解散やコロナ休止を経て各活動団体の継続性に支障をきたし、高齢者の集える場がなくなりつつある。	住民自身が困らないよう、集いの場に関する話ができる機会が持てる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>①各地区での活動状況を把握し整理する。</li> <li>②各活動団体運営などに関して、社会福祉協議会とともに参加者からの声を聞く。</li> <li>③各地区や学区全体を対象した会議などへ参加し、地域の実情を伝え、地域住民自身が今後について考えられる働きかけをする。</li> <li>④集いの場へ参加できていない現状を整理し、各地区の自主活動団体や社会福祉協議会などとも協働する。(送迎ボランティアの活用など)</li> <li>⑤学区内支え合い・助け合いフォーラムを機にサロンや老人会、自治会活動や見守り会議などへの介入時、各地区で活動している支え合い・助け合い活動などに対する意見を収集する。</li> <li>⑥各地区住民福祉活動計画推進に伴い、役員や学区全体での福祉懇談会などを基に、周知や支援方法などを社会福祉協議会と協働する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域包括支援センターきらら</li> <li>・生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)担当者</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各地区自治会館や公民館</li> </ul>	令和6年4月1日～令和7年3月31日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各地区での自主活動を把握するために情報収集を始めることができた。</li> <li>・サロン開催に向けての後方支援を行い、はなだふれあいサロンを開催できた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・多景地区への介入がなく地域情報が把握できていない。特に八坂町のキーパーソンがいない。</li> <li>・はなだふれあいサロンが定着するよう、引き続き、後方支援が必要である。</li> </ul>

## 学区別評価

## (5) きらら学区評価

**令和6年度 彦根市地域包括支援センターきらら「若葉学区」地域支援計画および実施結果**  
**(区域ごとのニーズに応じて重点的に行う業務について)**

地域の目標： 地域全体で見守り連携できる関係づくりの啓発を行う。

ニーズ	目標	活動内容	担当・役割	場所	実施時期	成果	問題点・今後の方向性
<p>・古い地域は40年以上前に建設されており、高齢化が進んでいる。独居、高齢者世帯が多い。同居されていても、精神疾患や引きこもりなど8050問題など、課題の多い家庭が増えている。地域住民による支え合い・助け合いが必要となっている。</p> <p>・東側エリアについては高齢者も多く一定の知名度はある。反面役割について正確に周知されておらず、認知症に対する理解も低い。関係機関を通じて広報する必要がある。</p> <p>・地域での取組が、役員改選などで継続できない課題がある。</p>	<p>①引きこもりの実態把握ができるための仕組みを構築する。</p> <p>②感染予防、リスクの啓発に努めながら、住民への介護・認知症予防の啓発を行う。</p> <p>③住民互助の仕組みづくりの支援を行う。</p>	<p>①地域の民生委員との情報共有と連携を目的とした意見交換会の開催や定例会にも参加して、地域の情報を共有して行く。</p> <p>②地域の自治会長・民生委員・サロンの世話役、学区社会福祉協議会、生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)等との連携や情報共有を図る。同時に、行政機関(保健所、警察、高齢福祉推進課、障害福祉課、社会福祉課、社会福祉協議会等)とも連携し、多問題について情報共有を図る。</p> <p>③定期的にサロンや金亀体操自主グループ等の活動に参加し、後方支援を行う。活動を通じて認知症予防に向け、啓発活動を行う。</p> <p>④自治会や学区社会福祉協議会と連携し、住民、自治会向けに介護・認知症予防、権利擁護・成年後見制度等の講座を行い、地域での見守り合い・支え合いの意識を高める。</p> <p>⑤地域の見守り活動の会議に参加し、住民の生活課題を把握し解決方法を住民と模索する。</p> <p>⑥活動参加や関係機関から得た情報を基に、個別訪問を試みる。</p> <p>⑦住民互助の仕組みづくりの推進について、住民・社会福祉協議会と協力しながら推進していく。</p>	<p>地域包括支援センターきらら 生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)担当者</p>	<p>若葉学区東側地域 ・各自治会 ・各サロン ・各自主グループ ・各自治会集会所 ・若葉小学校</p>	<p>令和6年4月1日 ～令和7年3月31日</p>	<p>・11月にケアマネジャーと民生委員を対象に勉強会を開催し、ケアマネジャーと民生委員の連携を図れる土台を作ることができ、民生委員との連携は密になった。それにより気軽に相談し合える関係性になっている。</p> <p>・民生委員からの個別ケースの相談があり、支援につなげる事案がいくつかあった。</p> <p>・生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)との定例会において、地域の情報や多問題に関する情報共有を行うことはできた。</p> <p>・2期の見守り会議や若葉学区住民福祉推進会議に参加し、課題やニーズを把握する機会を持つことができた。</p> <p>・暮らしのサポート若葉が立ち上がり、学区全体に広がるよう、彦根市社会福祉協議会と後方支援含め協働した。</p> <p>・わかば薬局、ひなつ薬局との連携は図れるようになってきた。また、個別の相談も数件あった。</p>	<p>・彦根市社会福祉協議会と協働するケースが減っているが、現状の分析ができていない。</p> <p>・学区全体の地区診断が必要である。</p> <p>・民生委員との学区全体の見守りに関する協議の場を設ける必要がある。</p> <p>・令和7年度に再開されるサンタウンでの金亀体操グループが定着できるよう、後方支援が必要である。</p> <p>・広報活動に対する取組を十分に行うことができおらず、地域包括支援センターの周知が引き続き必要である。</p> <p>・暮らしのサポート若葉の活動が定着するよう、後方支援が必要である。またこの活動に関してケアマネジャーへの周知ができる取組が必要である。</p>
<p>・西側エリアは生産年齢層が多いため、地域包括支援センターの役割についてはあまり知られていない。地域包括支援センターも状況把握しきれていない。</p> <p>・住民が集まれる場所は自治会館のみ。危機感の希薄さから自治会館開放の意識も弱い。</p> <p>・今後、高齢化が進み、10年後には地域課題が表面化して行くと考えられる。その前に広報活動、支援活動を進める必要がある。</p>	<p>①現状把握や、今後の顕在化していく問題に対する意識の啓発活動を行う。</p> <p>②高齢者が歩いて行ける・集える場所が増える。</p> <p>③住民互助の仕組みづくりの支援を行う。</p>	<p>地域の民生委員との情報共有や連携を目的とした意見交換会の開催や、定例会に参加し、地域の情報を共有して行く。</p> <p>地域ケア会議にて連携できた地域の関係者(自治会役員や学区社会福祉協議会、民生委員等)との連携を深めていく。</p> <p>生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)と情報共有し、地域の情報を得る。</p> <p>民生委員や生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)と協働し、地域包括支援センターの広報活動を模索する。また、自治会の支援を受けて住民が集える場づくりを模索する。</p> <p>住民互助の仕組みづくりの推進について、住民や社会福祉協議会と協力しながら推進していく。</p>	<p>地域包括支援センターきらら 生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)担当者</p>	<p>若葉学区西側地域 ・各自治会 ・各自治会集会所 ・ディサービスセンターきらら会議室</p>	<p>令和6年4月1日 ～令和7年3月31日</p>	<p>・暮らしのサポート若葉が立ち上がり、学区全体に広がるよう、彦根市社会福祉協議会と後方支援含め協働した。</p> <p>・わかば薬局、ひなつ薬局との連携は図れるようになってきた。また、個別の相談も数件あった。</p>	<p>・暮らしのサポート若葉の活動が定着するよう、後方支援が必要である。またこの活動に関してケアマネジャーへの周知ができる取組が必要である。</p>

(5) きらら学区評価

令和6年度 彦根市地域包括支援センターきらら「亀山学区分」地域支援計画および実施結果

(区域ごとのニーズに応じて重点的に行う業務について)

地域の目標： ①地域での支え合い活動が定着する。 ②災害時を想定した地域での見守り合いの土台ができる。

ニーズ	目標	活動内容	担当・役割	場所	実施時期	成果	問題点・今後の方向性
①お手伝い亀山の活動はあるが、住人周知には至っていない。	・お手伝い亀山の認知度が向上する。 ・生活の困りごと(ニーズ)に合わせた活動を実施できる。	(1)お手伝い亀山推進会議に参画し、生活支援に対する需要と供給について、助言等を行っていく。 (2)活動メンバーと介護支援専門員との懇談会を行い、実際のニーズの把握を図る。 (3)訪問や研修会、講座等を通して、地域包括支援センターの活動紹介を行うことで、周知を図っていく。 (4)活動メンバーとの相談し合える関係性を構築する。また、活動メンバーの士気を高める。	・地域包括支援センターきらら(地域とのコーディネート) ・お手伝い亀山活動メンバー(実際活動) ・生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)担当者(適宜相談)	亀山出張所 亀山公民館等	令和6年4月1日 ～令和7年3月31日	・お手伝い亀山の活動が、定着してきている。毎月のミーティングにも参画し、専門職とサポーターとの相談できる関係はできてきている。 ・ケアマネジャーとサポーターとの懇談会開催とともに、学区の住人に困り事があった際に紹介できるようケアマネジャー対応のリーフレット作成により周知できるよう支援し、わずかではあるものの、お手伝い亀山につながった事案ができた。	・適切にインフォーマルサービスを利用してもらうためのケアマネジャーへの周知が必要である。 ・お手伝い亀山の活動が継続できるよう、引き続き支援が必要である。 ・個別対応ができるよう、サポーターと専門職との連携を強化を図る必要がある。
②高齢化率が高い学区であり、災害時を想定した対応について、検討する必要がある。	高齢者等の住人が安心して亀山学区での生活を送ることができる。	(1)現在、実施できている見守り会議に参画し、各自治会の防災への取組を把握する。 (2)民生委員の定例会、福祉委員懇談会、学区社協活動等、地域を見守る担当者の会議、活動に参加し、顔の見える関係を築く。 (3)個別ケースを基に、地域毎の特徴や各自治会としての強み弱みを考察する。 (4)亀山学区での「防災」をテーマとした地域包括支援センター単位地域ケア会議を開催する。	地域包括支援センターきらら(地域活動参加、個別対応、会議開催等)	活動開催場所(自治会館、公民館等)	令和6年4月1日 ～令和7年3月31日	・12月に災害時を想定したテーマで包括単位のケア会議を実施し、亀山学区全体での検討が行えた。 ・東清崎や安食中町の見守り会議から、個別ケース支援へとつながる事案も増えた。顔の見える関係は強くなっている。	・引き続き見守り会議に参加し、自治会での防災に関する情報を収集し、ケアマネジャーと自治会住人との連携を強化する必要がある。 ・個別ケース支援につながられるよう、他の地域でも見守り会議の開催ができるよう働きかける。
③現在の活動継続に当たって、次代の世話役がない事から、現世話役自身の不安が大きくなってきている。	担い手問題の解決を目指すと共に、現在の世話役の不安が軽減する。	(1)各サロン、自主体操グループ等の世話役との相談し合える関係づくり、不安や負担の軽減を図る。 (2)学区内でのサロン等活動世話役同士の懇談会を開催し、活動実施や継続に対しての課題、悩みを共有する。 (3)活動自体が地域の高齢者等へ及ぼす効果や社会貢献である事を伝え、世話役自身のやり甲斐の向上を図る。	・地域包括支援センターきらら(世話役等の関係構築、サロン等活動参加、交流会の提案等) ・生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)担当者(サロン間交流会開催)	各サロン等活動会場 世話役宅や地域包括支援センターきらら等相談ができる場	令和6年4月1日 ～令和7年3月31日	・サロンへの参加や世話役との交流により、世話役からの相談ができる関係づくりはできた。 ・活動自体が社会貢献であることを伝え、世話役のやり甲斐向上を図れるように支援を行ったことにより、世話役の活動意欲の向上を図ることができた。	・学区内の各組織単独での活動で、他組織との共有や連携する場がないため、まずはサロン間交流会を開催し、世話役同士の相談し合える関係や、顔が見える関係をつくる必要がある。また、いずれは自治会の枠を越えた負担軽減を図れるよう支援していく必要がある。
④独居高齢世帯の増加や人とのつながりの希薄化と共に、困り事が見えない中で過ごす住人が増加する可能性がある。	困っている人が相談できる環境をつくる。	(1)民生委員や福祉委員等、戸別訪問等を行う担当者との顔の見える関係、報告、相談し合える関係づくりを図っていく。 (2)各自治会(世帯数が少ない地域は複数合同)において、見守り会議が行われるよう、働きかけを行っていく。 (3)日頃の相談対応の中で、地域と地域包括支援センターきららとの連携強化を図っていく(周知強化)。	・地域包括支援センターきらら(個別ケース対応、関係者との連携強化) ・生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)担当者(見守り会議立ち上げへの提案、支援)	各自治会公民館 各活動場所	令和6年4月1日 ～令和7年3月31日	・定例会の参加、日頃のコミュニケーションにより、相談し合える関係づくりができた。 ・11月にケアマネジャーと民生委員を対象に勉強会を開催し、ケアマネジャーと民生委員の連携を図れる土台をつくったほか、相談し合える関係づくりができた。	・民生委員の改選により、新たな関係づくりが必要であり、これまでのように相談し合える関係をつくっていく必要がある。 ・地域活動は福祉委員が担っており互いに情報共有されていないため、ネットワークの構築が必要である。

学区別評価

(5) きらら学区評

令和6年度 彦根市地域包括支援センターきらら「河瀬学区分」地域支援計画および実施結果  
(区域ごとのニーズに応じて重点的に行う業務について)

地域の目標： 地域資源を活用した連携・協働が行える体制構築に向けての基盤を整備することができる。

ニーズ	目標	活動内容	担当・役割	場所	実施時期	成果	問題点・今後の方向性
<p>・コロナ禍以降、実情把握できていない自主グループやサロンがある。また、活動を継続していくことに対して負担感も聞かれる。 ・中年層、前期高齢者が要介護状態になる方が一定数存在する。</p>	<p>①自主グループの活動状況を把握できる。 ②フレイル予防、介護予防について啓発する。 ③前期高齢者が自身の健康管理・予防の意識を持てる。</p>	<p>①生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)と連携し、コロナ禍以降、実情が把握できていないサロンや金亀体操自主グループの活動状況を把握し、活動継続や再開に向けての後方支援を行う。 ②定期的に金亀体操自主グループやサロン等の活動に参加し、代表者の負担感や困り事等を把握し、助言等を行う。 ③生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)との定例会を継続し、各地域の実情を共有し、ニーズに応じて地域への支援を協働する。 ④介護予防やフレイル予防についての出前講座開催について啓発を行う。 ⑤前期高齢者に対して健康推進課との関わりを強化し、地域住民を対象として健康管理や予防、検診、早期受診に向けての啓発を行う。</p>	<p>①～⑤ 地域包括支援センターきらら ②③ 生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)担当者 ⑤ 彦根市健康推進課</p>	<p>・各自治会公民館 ・彦根市河瀬支所 ・地域包括支援センターきらら内相談室</p>	<p>令和6年4月1日～令和7年3月31日</p>	<p>・河瀬学区文化祭にて、ブースを設けることができ、地域包括支援センターを多世代に渡り周知ができた。 ・生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)との定例会は継続して行え、各地域の実情を共有することはできた。 ・葛籠町へは健康管理に関する健康講座を開催した。 ・金剛寺へは認知症の人を地域で見守る人権研修を開催した。また蓮台寺、川瀬馬場へ講座を実施した。</p>	<p>・学区内21自治会の活動が把握できておらず、サロンや自主グループ活動への積極的な介入が行えていない。 ・引き続き、生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)と連携し、ニーズに応じた地域への支援を協働する必要がある。 ・健康推進員を交えての取組(前期高齢者への健康意識への働きかけ)。</p>
<p>高齢化率の地域差は大きく、多問題を抱えるケースも多い。地域住民が取り残されないための支援体制の整備が必要である。</p>	<p>①河瀬学区民生委員との意見交換会を定期的に行い、民生委員との連携強化を図り、多機関協働に向けての支援体制構築を目指す。 ②WAっとねす春日との連携・協働を強化する。 ③地域の実情に応じた見守り合いの体制ができる。</p>	<p>①生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)との協働のもと、河瀬学区民生委員との意見交換会を開催、民生委員の困り事や思いの把握に努め、民生委員との連携強化を図る。 ②WAっとねす春日との連携強化を深め、協働して地域住民の支援を行い、地域の実情を把握する。 ③民生委員やWAっとねす春日との連携強化により、行政機関、警察、保健所、障害関係機関等とも協働し、地域住民が取り残されないための支援体制の構築を図る。 ④サロン代表や老人会長、自治会長等と連携し、地域の実情に応じた見守り合いの体制へとつなげていく。 ⑤連携・協働の中から把握した支援を必要とする地域住民への介入を図る。 ⑥地域包括支援センターきららのリーフレット等を活用し、相談窓口としての周知を継続する。</p>	<p>①～⑥ 地域包括支援センターきらら ①～④ 生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)担当者 ②③ WAっとねす春日</p>	<p>・各自治会公民館 ・彦根市河瀬支所 ・WAっとねす春日 ・地域包括支援センターきらら内相談室</p>	<p>令和6年4月1日～令和7年3月31日</p>	<p>・河瀬学区北地区民生委員との見守り会議が形となり、今年度は3回開催できた。 ・WAっとねす春日との連携は深くない、個別ケースも相談できる関係になっていない。 ・11月にケアマネジャーと民生委員を対象に勉強会を開催し、ケアマネジャーと民生委員の連携を図れる土台をつくることできた。</p>	<p>・河瀬学区の北地区の見守り会議を定期的に開催できるよう日程調整など周知手段を検討する必要がある。 ・河瀬学区社会福祉協議会が休止中で次年度以降も見通しが立っていない現状から、生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)と協働した土台作りが必要である。 ・民生委員個々の関わりはあるが、学区全体としての関わりができていないため、活動状況を把握し、民生委員との連携を強化する必要がある。 ・地区ごとの分析を行い、それぞれのニーズや課題を把握・介入していく必要がある。</p>

## 学区別評価

## (6) いなえ学区評価

**令和6年度 彦根市地域包括支援センターいなえ「稲枝北学区分」地域支援計画および実施結果**  
**(区域ごとのニーズに応じて重点的に行う業務について)**

地域の目標： 住民が地域資源を有効に活用できるようにする。

ニーズ	目標	活動内容	担当・役割	場所	実施時期	成果	問題点・今後の方向性
町によって支援体制が進んでいない。北学区安全・安心まちづくりの支援者、利用者とも募集するがなかなか来ない。	住民に北学区安全・安心まちづくり協議会の支援を知ってもらう。併せて町単位の支援体制ができる。	①北学区安全・安心まちづくり協議会と連携して支援者、利用者の紹介をする。 ②地域資源を住民が利用できるよう資源リストの配布などで働きかける。 ③生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)と連携して情報収集、意見交換をする。	・北学区安全・安心まちづくり協議会 ・民生委員 ・生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員) ・自治会 ・行政 ・地域包括支援センターいなえ	北学区全域 (11町)	令和6年4月1日～令和7年3月31日	①②③全て実施 個別ケースを通じて北学区安全・安心まちづくり協議会との連携が深まった。重度化して住民支援を超える人の介護への移行の形もできた。生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)との情報交換に加え北学区まち協へも、新規紹介を適宜行った。	住民互助がベースであり、緊急時の体制については課題である。支援者の高齢化、支援者不足も課題である。
町のサロンが閉鎖になり運動と集いの場が減った。サロン運営について地域の理解がほしい。	徒歩圏に運動と集いの場ができる。運動と交流を通じて介護予防できる。	生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)と連携して ①出路町の実態把握、くわくわ企画の進捗確認をする。 ②適宜集いの場を紹介する。 ③稲枝地区公民館や南老人福祉センターの情報収集、情報提供を行い活用につなげる。	・生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員) ・自治会 ・行政 ・NPO法人ホームスイートホーム ・稲枝地区公民館 ・各町サロン、金亀体操関係者 ・地域包括支援センターいなえ	北学区全域 (11町) 左①は出路町	令和6年4月1日～令和7年3月31日	①②③全て実施 介護保険外サービスとして南老人福祉センターや稲枝地区公民館の紹介を積極的に行った。くわくわ企画の進捗についても生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)を通じて適宜情報交換を行っている。	サロンについては担い手がいてこそである。担い手不足が課題である。地域資源については随時情報収集していきたい。

## 学区別評価

## (6) いなえ学区評価

## 令和6年度 彦根市地域包括支援センターいなえ「稲枝東学区分」地域支援計画および実施結果

## (区域ごとのニーズに応じて重点的に行う業務について)

地域の目標： 町単位での支援体制ができ、地域でのつながりを深める

ニーズ	目標	活動内容	担当・役割	場所	実施時期	成果	問題点・今後の方向性
町単位で生活支援、移動送迎などの支援体制ができるとよい。自治会によって温度差がある。	町の実情に応じた支援体制ができる。必要に応じて資源が利用できる。	・東学区での単位ケア実施に向け、生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)との連携、推進委員会の出席等を通じて進捗状況を把握し、状況に適した会議開催ができるようにする。 ・稲枝の資源リストの配布等での紹介。	・民生委員 ・ボランティアグループ ・生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員) ・自治会 ・住民福祉活動計画推進委員 地域包括支援センターいなえ	東学区全域	令和6年4月1日～令和7年3月31日	東学区で地域包括支援センター単位地域ケア会議を開催した。その過程において民生委員や生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)、地域支援者と意見交換し、地域支援の進捗状況を把握しながら実情に適した話が展開できた。	価値観が多様化する中で町によって温度差があることは否めない。それを踏まえた対応を考えていきたい。
自治会未加入、出入りの多い集合住宅が散見される。身寄りがなく近隣とのつながりも弱く緊急時に困る。	重度化する前に支援者につながる。	・本人の意思表出ができる間に今後の方向性が話せるよう民生委員等と連携を取って支援していく。 ・住宅の管理人、医療機関等とも連携する。 ・地域包括支援センターの周知。 ・「いなパト」の効果的な活用。	・民生委員 ・自治会 ・生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員) ・住宅の管理人 ・医療機関や薬局 ・行政 ・地域包括支援センターいなえ	ビレッジハウス 市営住宅 その他集合住宅	令和6年4月1日～令和7年3月31日	身寄りのないケースや家族の関わりが薄いケースについて民生委員、住民、専門職と連携を取りながら支援ができた。「いなパト」で毎月訪問対象に入れたり生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)と連携を取ることで変化に早く気付ける仕組みづくりができた。	身寄りがないとサービスや関わりを敬遠されるケースがある。また支援拒否されると本人の意思を尊重する以上支援体制が築けない。

## 学区別評価

## (6) いなえ学区評価

**令和6年度 彦根市地域包括支援センターいなえ「稲枝西学区分」地域支援計画および実施結果**  
**(区域ごとのニーズに応じて重点的に行う業務について)**

地域の目標： 早期の支援につながることで重度化を予防する。

ニーズ	目標	活動内容	担当・役割	場所	実施時期	成果	問題点・今後の方向性
介護保険や他者の支援を受けることに遠慮があるのか、介護保険の利用控え、支援拒否のケースがある。	早期に支援につながり重度化予防する。地域の支援者と連携して効果的な支援ができる。	①自治会単位で介護予防、介護保険サービスの利用に向けて啓発する。 ②民生委員と連携して支援困難事例に長期的に関わる。 ③見守り協力店、サロンなどに出向いて関係づくり、相談しやすい仕組みづくりをする。	・民生委員 ・自治会 ・生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員) ・見守り協力店 ・サロン、まちの保健室 ・地域包括支援センターいなえ	西学区全域 (7町)	令和6年4月1日～令和7年3月31日	①②③ともに実施 自治会での講座を活用して啓発活動を実施した。民生委員と連携して困難事例に関わった。サロンなど地域の集いに出向いて、関係づくりに尽力した。	同居が多い地域柄もあり、他者の支援を受け入れることに抵抗が見られ、利用控え、重度化してから上がってくるケースが多い。
高齢化・過疎化で徒歩圏に集いの場、運動の場が少ない。交通の便が悪い。	新たな介護予防の場ができるとよい。資源につながるとよい。	①NPO法人 ホームスイートホームを新たな拠点として活用する。みかさつかさの太極拳を適宜紹介する。施設側の送迎についても相談する。 ②新たに誕生する福祉有償運送移動送迎について進捗を情報収集しながらマッチングする。 ③その他、地域資源の紹介する。 ④金亀体操自主グループができるよう機会を捉えて啓発する。	・NPO法人ホームスイートホーム ・ケアマネジャー、事業所 ・生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員) ・サロン ・金亀体操自主グループ ・地域包括支援センターいなえ	西学区全域 (7町)	令和6年4月1日～令和7年3月31日	①②③④とも実施 NPO法人ホームスイートホームの福祉有償運送が立ち上がったので紹介、周知、連携に努めた。太極拳も送迎を含めて相談、紹介、ともに利用者も増え満足の声を聞いた。金亀体操は紹介、啓発するも実現には至らなかった。	資源の担い手が限られているので適正利用に向けて啓発していきたい。要望が高くと誤った利用が増えると資源の消滅につながることに留意したい。